時速300kmのサヨウナラ

紅茶大全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時速３００ｋｍのサヨウナラ

【Ｎコード】
Ｎ８１７３Ｍ

【作者名】
紅茶大全

【あらすじ】
新しい春への期待が深まる３月。僕は新幹線に乗りながら１０年前を思い出していた――「現代」「冬」「青春」をキーワードとした短編です。Ｃｈｌｏｒｏ　Ｆｉｃｔｉｏｎで執筆する紅茶大全が送る、やさしくて少し切ないストーリー。ぜひ作者のブログにもお越しください。ｈｔｔｐ：／／ｊａｉｍｅｌｅｔｈｅ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／

発車ベルがなる。
時速３００？の旅が始まる。
ガラス窓の向こうで君が涙ぐむ。
嗚咽はベルの音で聞こえない。

ワスレナイデ

君の口がそう動く。
さらに君が何かを告げようと口を動かす。
でも僕の視界は滲んでそれを見ることができない。
悲しみも涙も３００？の速度で置いていくことができたらいいのに。
そしたら全てを忘れてもう一度新しく歩き出せるんだろうか。

『発車ベル』

席は窓から3番目のC席だった。
駅弁を買って乗車した僕は荷物を棚に上げようと苦労している女性を見つけた。
「手伝いましょうか？」

「すみません」

白い毛糸の帽子をかぶった彼女は荷物が大きいというより彼女自身の身長が足らずに苦労しているようだった。後ろから手を添えて荷物を奥へと押し込む。

「ありがとうございます」

そう礼を言って彼女は僕の通路を挟んで向かいのDの席に座った。

※

新幹線は時速３００?で走行する。大阪から東京まで3時間しかかからない。後ろへ飛ぶように流れていく景色を見ながら駅弁をビニール袋から取り出した。

急な出張だった。前任者から引き継いだ取引先との交渉が上手くまとまらず、自分自身で大阪まで出向かなくてはいけなくなってしまったのだ。行く前は憂鬱だった気分も交渉が上手く纏まったとなればそれなりに上機嫌となる。出張が終わった旨をメールで伝え終え、ネクタイをゆるめビールでも飲むか、とワゴンを探した僕は目の前に現れた女の子をみてギョッとした。

泣き腫らした目をして餞別であろう小物を色々抱えた女の子は僕の奥のA席に座りたいと告げてきた。

腰を上げて通路を空けながら、女の子が握りしめている色紙のようなものを見てふと感慨深いものが込みあげてきた。

そうか、もう3月なのか。
今は上京シーズンなんだな。

※

「俺、東京の大学受けようと思う」

そう告げたときのヒカリの表情を僕はよく覚えていない。
ただ彼女は泣いてはいなかった。少しだけ声が震えていた。

「そう」

付き合って1年半たった夏だった。受験勉強で忙しい僕に、1個下のヒカリは文句ひとつ言わずに2週間に1回のデートに付き合ってくれていた。
クーラーが適度に効いた喫茶店で、僕とアイスコーヒーのグラスだけが汗をかいていた。

「いいと思うよ。ケンちゃんがやりたいことって東京の方がレベル高そうだもんね」

東京への憧れは元々あったのだと思う。でもそれ以上に地元以外への進学に何か言いしれぬ魅力を感じていたのも確かだ。夏になり、志望校を具体的に決め、かつレベルの高いところを目指すように言われた僕の進路は自然と東京に向いた。

「でもやっぱり東京の大学って難しいイメージない？ケンちゃんがんばらないとじゃん」

ヒカリの声はもう震えていなかった。それは彼氏がやりたいことに前進していくことを素直に喜んでいる声だった。少なくとも僕にはそう聞こえた。

思えばヒカリは物わかりのいい子だった。僕はヒカリが泣き叫んだりするのを彼女と知り合ってからの３年間で見たことがない。あまり自己主張をしない性格なのだろう。逆につきあい始めはヒカリがなにを考えているのかわからなくて怒ってしまったこともある。

スコーンを追加し、学校の宿題の愚痴を言い合い、次のデートの予定を立てて、店をでようとした時だった。ヒカリが視線を合わせないままポツリと言う。

「でも…東京の大学行ったらもう会えないのかな」

※

気づくと夕暮れの中、外では雪がちらついていた。時速３００？の外側で雪は静かに舞い降りていた。

A席に座った女の子は先ほどまで涙を流しながら色紙を読んでい

たが、今は窓に頭を預ける形で眠っている。

そういえば俺が上京する日も雪がちらついていたな、などと思い出す。寒さが身に染みるような気温のなかヒカリがくれたホッカイロを持って新幹線に乗り込んだ。

発車ベルの残響が消え、人目を気にすることなく泣いたあと、僕を迎えたのはなんとも言えない虚しさだった。ヒカリとはいつも一緒にいたわけではない。そんなにベタベタしていたわけでもないのに、精神的に隣に居たヒカリがいなくなったことは僕にとてつもないダメージを与えていた。それは決して「身を引き裂かれるような」という鋭さをもったものではなかった。それは地面が消えてしまったような不安定さをもっていた。その喪失感は痛みを伴ってはいなかった。痛みであれば耐えることもできたのかもしれない。けれどもその喪失感は涙を流すことでしか埋められず、そして決して埋めきることはできないものだった。

文明が発達して300?の移動ができるようになろうとも、
電話ができようとも、
メールができようとも、

距離は縮まらない。

そんな当たり前のことを身をもって知った夜だった。
乗っている人の感情とは無関係に新幹線は走り続け、そして東京駅に着く。
眠っている女の子はどんな夢を見ているのだろう。

※

２日ぶりの東京駅は雪の匂いがした。フローリングは雪を踏みしめた人が歩いたせいで少し濡れている。
僕が上京してきた１０年前と東京駅の中はさほど変わっていないような気がした。けれどもやはり何かが違う。１０年前、ファー付きのコートを着ても東京駅で僕は震えていた。今はネクタイを結び直してスーツを着こなし自分が向かうべき出口を知っている。

東京みやげの売店の横を通り過ぎながら僕はあの女の子を見つけた。
色紙や手紙は手荷物の中に仕舞ったのだろう。最小限の荷物だけで改札に向かっている。きっとあの子はこれから一人暮らしのアパートだか寮だかに向かって、そしてまだ開封されていない段ボールに囲まれて一晩を過ごすのだろう。それはきっと辛い夜だ。それでも夜明けはきっと新しい。段ボールよりも重量のある想いがつまった色紙や手紙を背負い、毅然と顔をあげ、涙は凍る前に拭わなければいけない。
そうやって雪を踏みしめて歩いていかなければいけない。
僕はそっと彼女にエールを送りながら改札を通過した。

突然、
僕の前を白い物体が駆け抜けた。
雪ではなかった。人だった。
白い毛糸の帽子をかぶったその女性はその大きな荷物を途中で投げ捨てるように放り出し、
駆けて、
駆けて、

駆けて、
そして待ちかまえていた男性の胸に飛び込んだ。
強く抱き合うその男女を見て僕は300?の速度で恋人に会いにくることもできるのだと思い出した。あの日、僕がヒカリと別れた日、彼女は僕にホームで「忘れないで」と言った。そして続けてこういったのだ。

マッテテ、アタシモイクカラ

彼女が東京の大学を目指したことを僕はその年の暑中見舞いで知った。
けれども半年後、彼女は東京に来なかった。大学2年生の暑中見舞いで彼女が地元の大学に進学したことを知った。

「ケンちゃん」

驚いた。
出張が終わったことはメールで伝えてあった。新幹線にのった時刻もそれとなくわかるだろう。けれど、まさか改札を出たところで迎えにきてるとは考えもしなかった。

「ヒカリどうしてここに?」

彼女と再会したのは社会人1年目の秋だった。就職活動のスーツを着ていた彼女に東京駅で偶然出会った。驚いた僕に彼女はおどけてこういった。

『別にケンちゃんのためじゃないよ。アタシが東京を選んだの』

そこには僕と付き合っていたときとは違う自己主張できる彼女がいた。そしてそれはとても魅力的だった。僕はすぐに彼女を夕飯に誘った。

「出張お疲れ様」

びっくりしている僕を見て彼女は微笑んだ。僕はその笑みを見てただこう応えるしかない。

「ありがとう」

そして、

「ただいま」

＜END＞

（後書き）

最後まで、こんなあとがきにまで目を通していただきありがとうございます。

作者の紅茶大全です。

これは少し前に書いた短編です。大学の友人が2年に及ぶ遠距離恋愛の後やっと相手が上京してきた、という話を聞いて書きました。

別れは再会への準備という言葉がありますが、言葉に表せない別離だってあるのです。

この短編は今は東京で仲良くしているその大学の友人に捧げます。

言い表せないものを婉曲的に言葉を尽くして語るのが小説だと思っています。

ブログでは小説家になろうに投稿できないくらいの短編を時たま書いて載せています。よかったらぜひお越しください。携帯からも見れます。

ブログ「紅茶と文字列」

ｈｔｔｐ：／／ｊａｉｍｅｌｅｔｈｅ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8173m/

時速300kmのサヨウナラ

2010年10月22日00時59分発行